

皇學館大学教育学部研究報告集 第二号  
平成二十二年三月

# ミヒヤエル・エンデが『モモ』で訴えたかったこと

— その挿絵の解釈 —

深 草 正 博

# ミヒヤエル・エンデが『モモ』で訴えたかったこと

— その挿絵の解釈 —

深 草 正 博

## はじめに

ミヒヤエル・エンデの代表作に『モモ』<sup>〔1〕</sup>があり、その中に本人の手になるいくつかの挿絵が挟まれている。そのうちの特に二枚の挿絵に私は異常な関心を持ち、長い間その絵によってエンデが何を訴えたかったのだろうかと考えてきた。今ようやく私の頭の中に一つの解答が浮かび上がってきたように思う。

## 一、問題の挿絵

そもそも私が『モモ』に着目したのは、環境問題を文明史的に考察し、その中で「木を切る人と木を守る人」を人

ミヒヤエル・エンデが『モモ』で訴えたかったこと

間類型学的に考察していた時である<sup>(2)</sup>。すなわち、時間に関して、いわゆる直線の時間と円環的時間が、森林に対してどのような作用を及ぼすのか、それがその時の問題関心であった。

それを以下に要約すれば、歴史的に見た時、最初はどこでも円環的時間が支配的であったと見てよいであろう。だが、安田喜憲氏が明らかにしたように、紀元前一二〇〇年の気候変動は、蛇をシンボルとする大地母神からバール神を代表とする天候神に変化せしめることによって、人類の精神史上初めて、古代地中海世界の一角に一神教を誕生させた<sup>(3)</sup>。ここにおいて、世界は天地創造に始まり、終末に向かって一直線に進行していくという、直線的时间が成立することになったのである。

この直線的な時間意識が、キリスト教を通じて古代ローマからヨーロッパに受け継がれていくのであるが、一体いつ頃そこに定着するのであろうか。阿部謹也氏は、十一世紀以前のヨーロッパでは、なおかつ円環的にぐるぐるまわっていく時間が主であったと見ている。すなわちそれまでは、日本と共通する社会（「世間」）があり、「個人」の成立とともにそこから「離陸」し、ヨーロッパ独自の社会が形成され、そこから時間が直線になっていくと考えている<sup>(4)</sup>。さあ、いよいよ問題の挿絵を提示しよう。

次頁のこの二枚の絵によってエンデは何を言いたかったのであろうか。そこでまず、『モモ』のあらすじを簡単に見てみよう。第一図に見られるような古代ローマの円形劇場を思わせる、その廃墟のあるおそらくイタリアの大都會<sup>(5)</sup>で、人々のはのんびり暮らしていた。そこへある時、時間貯蓄銀行から派遣された灰色の男たちが、時間を盗む計画を持って忍び寄ってくる。そして人々が時間を無駄遣いしていることを説き、その節約を勧める。数字を出された計算があまりに説得的なので、「ああ、もつとはやくから儉約を始めなかったなんて、私はなんという不幸な男だろう」と叫び、人々は躍起になって時間を節約しようとする。しかしその結果として、人々の生活は日ごとに貧しくなり、

ミヒヤエル・エンデが『モモ』で訴えたかったこと

第一図



〈出典〉『モモ』10頁

第二図



〈出典〉『モモ』74頁

日ごとに画一的になり、日ごとに冷たくなっていったのである。それにともない人間関係もとげとげしくなってしまうた。

また、大きな工場や会社の職場という職場には、「時間は貴重だ―むだにするな!」、*「時は金なり―節約せよ!」*という標語が掲げられた。そしてついに大都会そのものの外見まで変わってくる。旧市街の家々は取り壊されてしまい、余分なものの一切ついていない新しい家が建てられた。その結果、大都会の北部には広大な新住宅街ができあがったが、そこにはまるっきり見分けのつかない、同じ形の高層住宅が、見渡す限りえんえんとつらなっている。それが第二図である。こうしたなかで、自分たちの生活が日ごとにまづしくなり、日ごとに画一的になり、日ごとに冷たくなっていることを大人たちは気付いていなかった。

このような状況に第一図の円形劇場の廃墟に住んでいたモモが現れ、灰色の男たちから時間を取り戻し、元のようにゆったりとした生活に戻してくれたのである。『モモ』の副題は「時間どろぼうと、ぬすまれた時間を人間にとりかえしてくれた女の子の不思議な物語」となっており、本書の主題はここに要約されているように思う。

## 二、解 釈

さて、改めて、これまで見たところから『モモ』はわれわれに何を言いたかったのであろうか、という問いを立ててみたい。

これに対して、臨床心理学の立場から河合隼雄氏が、すでにひとつの答えを与えている。氏は次のように言う。すなわち、社会全体の管理と画一化がすすみ、たとえば、日本中の人が同じ時刻に起床、同じ朝食をたべ、同じ服を着

るようにする、ということにでもなれば、多くの人は必死に抵抗するだろう。「個人」の重要さを人々は主張するところだろう。しかし、このような人たちでも、すべての人がまったく「同一の時間」を生きている、ということを確認している人が多い。一分間は誰にとっても一分間、午後の一時は日本のすべての人にとっても午後一時。だが果たしてそうだろうか。この事実を自明のこととすることによって、人間の画一化、個性の磨滅の第一歩が始まっているのではないだろうか。それはすべてのものの価値を均質化し、一直線上に並べられるような錯覚を起こさせる「お金」と同じ力をもっている。実際、『モモ』のお話では、時間をお金と同じように節約し、貯金するというアイデアが中心となるのである<sup>(6)</sup>。

このようなここまでの河合氏の分析には、実に鋭いものがあると思う。時間とお金のアナロジーは、あとでみるフランクリンを思い出させて大変興味深い。それでは、『モモ』から読みとる氏の結論は、どのようなものであろうか。それは『進歩』と『能率』を標語として、『遊び』を失い、個性を失ってゆく人々の姿が、『モモ』には見事に描写されている<sup>(7)</sup>、というものである。

さて、この河合氏の解釈はどうであらうか。もちろんひとつの『モモ』理解として大きくはずれているとは思わない。実際、エンデによれば、『モモ』に対して、現代社会で誰もが忙しくて「時間」のもてない存在になったことに注意を喚起させるためだったとか、人びとのストレス状態、世の中のであわだしさを警告するためだった、というような書評があったということである<sup>(8)</sup>。河合氏の見解はこれらに比べてより深い、それでも似ているといえる。しかし、エンデ自身は、この解釈は外面的表面的理解でしかないという。私も河合氏の理解は本質からずれていると感じた。すくなくとも、先に掲げた二つの図をよく説明できないと思う。

それでは、私はどう考えているのか。まず私は、灰色の男たちに、マックス・ヴェーバーのいう「資本主義の精神」

を見る。いうまでもなく、宗教改革によるプロテスタンティズムから生み出されてきたものだ。すなわち、神の栄光を増すために役立つものは、怠惰や享樂ではなく行為のみであって、そのために時間の浪費は最も罪の重いものであった。なぜなら、その浪費によって失われた時間だけ、神の栄光に役立つ労働の機会が奪いさられたことになるからである。<sup>(9)</sup> 時間節約を強要する灰色の男たちは、まさにプロテスタンティズムを体現している存在といえよう。ヴェーバーはこの時点では、まだのちのフランクリンのように、「時間は貨幣である」とまでは考えられていないと指摘しているが、逆に言えば、最後はそこまで行き着くのである。先の工場や会社の標語「時は金なり―節約せよ!」は、このフランクリン精神なのである。まさにこのような時間感覚において近代は成立するのである。まさしく、時間貯蓄を約束した男に、灰色の紳士が「あなたはいまや、ほんとうに近代<sup>(10)</sup>的、進歩<sup>(11)</sup>的な人間の仲間に入られたのです」と告げるのである。<sup>(12)</sup>

それではこの理解によって先の二つの図は説明できるのであろうか。この点で大変興味深い考察をしているのが、ヘレン・エラープである。彼女も宗教改革によって、人びとの自然に対する感覚が大きく変質したことを読みとっている。が、すでにその前にヨーロッパにキリスト教が入ってくることによって、時間の觀念が、以前は季節のように循環するものと考えられていたのが、今や直線的なものとなつたという。<sup>(13)</sup> 唯一至高神は地上のはるか彼方にいるという考えが広まると、地上は汚れているとされ、自然は悪魔の領土となつて、人間を自然から遠ざけた。<sup>(14)</sup> そうして、宗教改革時代になると、正統派は、祝祭の自然崇拜的な面を徹底的に排除すべきことを主張し出す。自然は征服すべきものであつて、楽しんだり、ましてや崇めたりするものではなくなった。<sup>(15)</sup> さらに、宗教改革者たちは、時間を直線的に捉える聖アウグスチヌス説を支持し、宗教改革以前にはなおかつ多くの人びとがとらわれていた、時間が循環することを前提にした考えや習慣をばかにしたのである。<sup>(16)</sup>

こうして、宗教改革によって一層強められた直線的時間の観念は、自然蔑視と表裏一体のものとなった。内山節氏の言葉を借りれば、「近代以降の人間たちは、時間論の視点からみれば、直線的な時間を確立することによって、円環の運動をする自然の時間世界から自立したのである。それは自然とは根本が異なる時空を手にすることによる、自然からの自立であった」ということになる。<sup>(16)</sup>これが自然破壊に連ならないはずはない。

さて、ここまで来て、改めて先の二つの図を見よう。第一図には、ローマの松がたくさん生えている。それに対して、第二図にはもはや木は一本も生えていない。というより伐採されてしまったのだ。

私は前にひとつの大胆な仮説を提起しておいた。すなわち、「社会が円環的時間から直線的时间に転換する時、木を切るようになるのではないか」と。<sup>(17)</sup>そう思っ二つの図を見ると、第一図の円形劇場は円環的時間の象徴であり、第二図のどこまでも続く一直線の道路は直線的时间の象徴のように見えてくるのであるが、いかがであろうか。

### 三、挿絵と現実——仮説検証——

ところで、次頁第三図を見ていただきたい。これはアメリカの森の分布とネイティブ・アメリカンの居住地の変化を示したものである。一六二〇年といえば、イギリスのピューリタン（プロテスタント）がメイフラワー号に乗って、アメリカのプリマスに到着した象徴的な年である。ここからわずか三百年にして、ネイティブ・アメリカンが一万年以上にわたって大切にしてきたアメリカの森は、その八パーセント以上が破壊されてしまったのである。そしてそれは安田氏も指摘するように、ネイティブ・アメリカンの消滅と軌を一にしている。<sup>(18)</sup>

先の説明に戻れば、直線時間的世界観を持ったピューリタンが、円環時間的世界観を持ったネイティブ・アメリカ

ミヒヤエル・エンデが『モモ』で訴えたかったこと



ンの土地に入り込んだことによって、急速に森林が破壊されてしまったといつてよいであろう。とすれば、社会が円環的時間から直線的时间に転換する時、木が切られるという私の仮説は、ドラスチックな形でアメリカ史において一応実証されたのではないか。と同時に、私の頭のなかで、先の第一図が第三図の上の二つの図と、第二図が下の二つの図と重なってしまうのである。

### おわりに

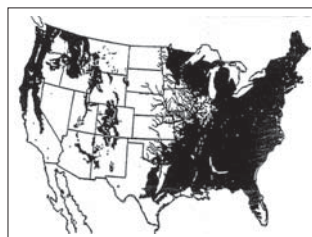
長い間、くりかえし『モモ』を読み、その挿絵の意味を考えてきた。ある時、ふと第三図と第一・二図とが重なった。それでどうしても書きたくなったのが本稿である。ただどこまで私の解釈が正鵠を射ているのか、それはわからない。<sup>19</sup>が、「文明と環境」

### 第三図

1442年のネイティブ・アメリカンの居住地



1620年の森の分布



1977年のネイティブ・アメリカンの居住地



1920年の森の分布



(右) 1620年と1920年のアメリカの森の分布、一つの点は2万5000エーカー  
(左) 1442年と1977年のアメリカ・インディアン（ネイティブ・アメリカン）の居住地の変遷  
〈出典〉安田喜憲『日本よ、森の環境国家たれ』7頁（なお、原図を入れかえ、矢印を付した）

の観点から見た時の、ひとつの解釈にはなっているのではないかと思う。あとは読者の判断にゆだねたい。

# 注

- (1) ミヒヤエル・エンデ(大島かおり訳)『モモ』岩波書店、一九七六年。
- (2) 深草正博「環境問題の文明的考察」『皇学館大学紀要』第三十六輯、一九九七年、のち同『環境世界史学序説』国書刊行会、二〇〇一年に所収。
- (3) 安田喜憲『気候が文明を変える』岩波科学ライブラリー、一九九三年、七十七〜九十頁。安田氏は、この紀元前一二〇〇年に始まる気候悪化が、大地を荒廃させてその豊穡性を奪い、さらに疫病を流行させたことによって、天候神の信仰の拡大のひとつの要因になったと見ている。
- (4) 阿部謹也『ヨーロッパを見る視角』岩波書店、一九九六年、四十四〜五十頁。
- (5) 子安美知子氏との会話で、エンデは『モモ』は、私が向こう(イタリアー引用者)で書いた最初の作品です。いってみれば、あれはイタリアという国への私の感謝の捧げものであり、愛の告白でもあります。私にたくさんものを贈ってくれたイタリア、そして何よりローマの町に対する―と述べていることから、この大都会とはローマのことであろう。子安美知子『エンデと語る』朝日選書、一九八六年、十頁。
- (6) 河合隼雄『中空構造日本の深層』中央公論社、一九八二年、一一〇〜一一一頁。
- (7) 同、一一一頁。
- (8) 子安、前掲書、一二六頁。
- (9)・(10) マックス・ヴェーバー(梶山力 大塚久雄訳)『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(下巻)

ミヒヤエル・エンデが『モモ』で訴えたかったこと

岩波文庫、一九六二年、一六九頁。

- (11) 前掲『モモ』、八十九頁、傍点は引用者。先の河合氏の解釈の中にも「進歩」が出てきていて興味深い。近代の成立と進歩的観念とは切り離すことができない。また、エンデは子安氏への説明で、「灰色の男たち」をテクノロジーであり、こまぎれ・分解の原理Ⅱ計量思考と言っている（子安、前掲書、一二二～一二三頁）。これこそまさに、「資本主義の精神」の核心にあるものであろう。それ故、この観点からすれば、一九八〇年代半ばにローマヘファーストフードのマクドナルドが進出したことを契機として、北イタリアのブラで始まった「スローフード」（筑紫哲也『スローライフ』岩波新書、二〇〇六年、十五頁以下参照）ひいては「スローライフ」を『モモ』は訴えている、という解釈も可能ではあろう。なぜなら、マクドナルド化とは、J・リッツァが見事に示したように（『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部、一九九九年、一〇六頁以下参照）、計<sub>け</sub>算<sub>け</sub>できること、定<sub>じ</sub>量<sub>り</sub>化<sub>け</sub>できることを重視することだからである。

- (12) ここまでは先の阿部氏と同様の捉え方である。が、これからエラーブが考察しようとしている時間と自然に関する考察は阿部氏にはない。

- (13) ヘレン・エラーブ『キリスト教 封印の世界史―西欧文明のダークサイド―』徳間書店、一九九七年、一八三～一八四頁。

- (14) 同、二〇二頁。

- (15) 同、二〇三～二〇四頁。

- (16) 内山節『時間についての十二章―哲学における時間の問題―』岩波書店、一九九三年、五十四頁。

- (17) 前掲拙著、一一八頁。

(18) 安田喜憲『日本よ、森の環境国家たれ』中公叢書、二〇〇二年、六頁。

(19) というのも、エンデ自身が子安氏との対話の中で、『モモ』を書いた理由を次のように述べているからである。すなわち「人間から時間が疎外されていくのは、いのちが疎外されていくことであり、そう仕向けていくおそろしい力が世界にある。しかし一方に、別の力がはたらいており、これが人間に治癒の作用を送ってくる。と、そこまでを暗示したつもりです」(子安、前掲書、一二七頁)。私が読み取った自然観とのかかわりはここにはない。

ミヒヤエル・エンデが『モモ』で訴えたかったこと